



「笹川杯作文コンクール 2009」～中国語で応募～ 第5回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「魯迅先生の啓示」

福建省 袁潔

私は、中国国内の魯迅記念館のほぼ全てを訪れたことがある。実際、先生の足跡を歩いたようなものである。ただ日本へは行ったことがないので、この旅は完全なものとは言えない。

北京の魯迅記念館の入り口で、仙台市の旅行宣伝のポスターをもらったことがある。日本へ留学した友人が、仙台の人は魯迅をととても尊敬していると話していたのを覚えている。上海の魯迅記念館では、一人の日本女性とその二人の子供を見かけた。そのお母さんは、魯迅先生が日本で撮った写真を指さして興奮ぎみに息子を呼んでいた。私は、突然、先生の感情の根源を探求してみたい気持ちになった。現代の日本人がどのように先生を評価しているのかということについて、とても知りたいと思ったのである。実は、先生の日本に対する態度に関しては、ずっと困惑してきたのである。魯迅先生は日本軍に断固抵抗していたにもかかわらず、一方では、その維新社会の文明に愛情を持っていたのである。逝去する2ヶ月前には、郁達夫と日本の秋を見る約束さえしていたのである。

私達青年は、幼い時からずっと、日本に対する態度を空虚な恨みか熱狂的な愛と表現するか、或いは定まらない曖昧さに揺れ動き、これまで先生のように明確な立場をとったことはなかった。そのため、私が真の日本を理解しようと思った時、必ず魯迅先生のことを思い出し、彼のやせっぽちで小柄でありながら堂々たる姿から何かを参考にしたいと思う。

事実上、中国自体の急速な発展により、国民は十分な心と将来の見通しが得られ、日本の近代以降の飛躍を正視できるようになってきた。ウイン・ウインの構造は結論としてアジア全体の利益によって支えられるということが実践で証明される時こそ、より多くの人々が日本を理性的に評価することができるのである。日本という我が国と複雑に入り組んだ関係を持つ国への対応に関しては、理性的に客観視すべきであり、歴史を忘れることはできないが、その長所を学ぶべきであるという人は多いだろう。それは何年も前に魯迅先生が文章の中で記した、「中国の伝統のすべての精巧なものをすべて放り出し、私達を銃撃する毛唐から我慢して学ばないと、新しい望みの芽生えはない。」（『華蓋集』）

しかし、人が魯迅先生に感動させられるのは、決して彼の理性によるものではない。私達は全てとても理性的に中日関係を分析するかもしれない。例えば、「2分法」や「ケースバイケース」といったツールは誰でも使える。ひとつおりの見解を発表するのに必要なのが言葉遣いや態度だけだということはよく分かっているが、中日関係を処理するにあたっては理性だけでは決して足りないと私は思うのだ。私は本当に好きな魯迅先生は、冷静であるということであるが、それより先に血の通った人だった。

許広平は魯迅を、「一部の人を極度に憎んで、まるで同じ場所では呼吸もしたがない程であるが、一部の人に対しては、過剰な期待を持って、例え火の中水の中という態度である。」（『両地書』）と批判しており、李長は魯迅のことを「徹頭徹尾、情緒の中にいる」と言っている。だから、魯迅先生がどのように日本を評価したかを見ると一彼は迷うことなくその凶悪で乱暴なファシズムの帝国を攻撃するが、同時に迷うことなくその国の真摯で素晴らしいものを心から愛した。この両

方が、先生にとっていずれも当然であり、心の深部から発する強烈な感情であり、先に「2分法」を考慮したというものではない。

ここから、私達青年の中にある一時の憤激する愛国心は、決して理性的な大局観を損なうものではないと私は思っている。例えば、日本の政治屋が靖国神社を参拝すると、友達がネット上で連名で糾弾し、“日本製品ボイコット”の類のスローガンを呼びかけることさえあるということを実際に目の当たりにしている。しかし、現実の生活では、身近にいる日本の学友とは変わらず親切につきあっているし、日本からの先進技術と理念に対して賛美の言葉を惜しむことはない。思うに、これこそ無意識のうちに先生の主張を実践していることになるのである。自分の立場を堅持すると同時に、人には誠実清廉に接する。これは、中国青年が日本の更には全ての物事に対応する時のあるべき態度であり、魯迅先生の態度でもある。

魯迅先生の『藤野先生』を読んで、私の胸中にふと熱い思いが湧き起こった。先生は屈辱を受け、仙台医専を離れた。「中国は弱い国だから、中国人は当然低能だ。60点以上なのは自分の能力ではない。」（『朝花夕拾』）しかし、この文章の中で、こうした屈辱が読者の悲しさと怒りを誘い、全文を通して藤野先生の友愛と品性が慰めを感じさせる。魯迅先生の一生の愛と恨みはいずれも明快なものである。彼は、決して理性によってのみ排斥するものと受け入れるものを決めていた訳ではない。魯迅先生は国民に対して厳しすぎると言う人がいるが、実は正反対であり、彼の非情さは愛情ゆえなのである。魯迅先生の国民と国民性に対する洞察は、精密な頭脳による精密な分析から出ているばかりではなく、より強く内容豊かな愛から生じているのである。

そのため、もし、現代の青年が真の日本を理解したいのなら、感情を込めなければならないのである。特に、本心からであることが必要なのだ。もし、全ての偏った考えを棄て、誠心誠意この民族を理解しなければ、恨みと愛の何処から話し始めることができるのだろうか？

明け方のキャンパスで、日本の女の子の孫梅（彼女は、中国語の名前で呼ばれることを好む）は、相変わらず真面目に我が母さんたちの「老年朝練団」について太極拳を学んでいる。私が目を細めて朝日の下の彼女たちが楽しそうに清新な空気を呼吸しているのを見ている。私は、中日関係は多分非常に大きな話題ではあろうが、今やそれ程膨大な話でもないだろうと思っている。それは、私、孫梅、朝のトレーニングをしている老人達の眼には、簡単なものとして映っている。それは、まるで手を伸ばしていっぱい日光を胸に取り込むような簡単さである。